

三重県鈴鹿市江島方言における 身体感覚を表すオノマトペ

佐藤虎男

はじめに

1. 調査対象地 鈴鹿市は、津市と四日市市との中間に位し、東は伊勢湾岸から西は鈴鹿山麓まで広がる田園都市である。一口に鈴鹿市方言ということには無理があるので、江島町に限定する。当地は海沿いに展開する町で、旧河芸(おが)郡白子(しん)町の大字の一つである。近畿日本鉄道によって、名古屋方面や大阪方面への交通は至便である。主な生業は商業であるが、会社員家庭が増えている。
2. 調査年月日 平成3年12月25日および平成4年2月23日
3. 話者 佐藤文子氏 大正13年1月3日生。満68歳。外住歴皆無。
4. 調査者・調査場所 佐藤虎男・話者の自宅。
5. 調査方法・調査時の様子 所与のテキストを中心にした質問調査。当地は筆者の郷里でもあるので、テキスト以外にもかなり確かめ聞きをした。

※○はテキストにある文脈に準ずる文、○はそれ以外の文を示す。

※紙面節約のため、特記すべきもの()以外は共通語訳を省略させていただく。

1. 全身の感覚

1-1 快不快 ○アセ カイタケド フロ ハイッテ サッパリシタ ワ。

○ヤット カゼ ナオッテ オカゲデ キブンガ スッキリシマシタ ワ。

○ヒサシブリニ ソトノ クーキ スーたら スーツシタ ワ。〔セーセールも〕

○チガイコト カラダ ウゴカサヘンデ ユチコチヤ ワ。〈コチコチスルは×〉

○アサカラ ウゴイテバッカデ モー クタクタヤ ワ。〈クタクタスルは×〉

○モー クタビレテシモテ グッターリヤ。〔グッタースルも〕

1-2 寒さ ○サムテサムテ ガタガタ フルエル ワ。〈ガタガタスルは×〉

○サブテ ブルブル フルタ ズ。〈ブルブルスルは×〉

○カゼヒータンカ セナカガ ゾクゾクスル ワ。

○ドッカーラ カゼ ハイッテクソノカ ナツヤ スースースル ナー。

1-3 熱さ ○ゴノ ヘヤ ボカボカト アツカイ ナー。

○エライ ボカボカト アツカイ。ヨーキデ ヨロシ ナー。

〔酒を飲んだ時などにボカボカスルを使うことは稀。熱い甘酒を飲んで体がホトツタというような、動詞を使った言い方が普通。〕

〔カッカを、卵酒を飲んだ時などには使わない。「ノボセテ カッカシテキタ。」のようには使う。〕

II. 皮膚の感覚

- オンセンニ ハイッタラ ハダガ スベスベシテキタ ワ。
 - コノ オンセン ナツカシラン ハダガ ツルツルスル ナー。
 - ク リーム ツケルト ハダガ シットリスル ワナー。
 - ア セデ セナカガ ベタベタスル。
 - シャツガ ヌレテ ベトベトト キモチワルイ ワ。〔同じ場合にベチャベチャとも言う。〕
 - セナカニ ナニカ ハイッテ ムズムズスル ワ。〔この場合にモゾモゾは×〕
 - ナンヤラ ハダガ カサカサシテ シカタガナイ ナー。〔カサカサヤとも。〕
 - テ ガ アレテ ガサガサヤ ワ。〔ガサガサスルとも。〕
- 〔ガサガサは手足の場合、カサカサは特定しない場合が多い。〕
- ヒヤケシテ セナカガ ヒリヒリスル。
 - スリムイタ トコガ ヒリヒリシテ カナワン ワ。〔火傷の場合にも言う。〕
 - キッタ トコガ エライ ズキズキスル。〔ズッキズッキは言わない。〕
 - キッタ トコガ ザクザクスル。〔切り傷でもおできでも。〕ズキズキの方が多い。
 - モノガ ササッテ チクチク イタイ。(とげ刺さって。) 針で刺すような痛み
 - ビリビリー ット デンキガ キテ サ。 ビククリシタ ワ。
 - ヤケツリ (火傷) シタ トコノ カワガ ズルズル ット ムケテ サ。
 - ソレ ミタ トキ ゾ ットシテ トリハダガ タッタ ワ。

腫れ物

- シモヤケガ エロテ (むけて) ドダイ (まぶし) ジンジンシテ シンボ デキヤン ワ。
〔ジンジンはやや稀。こういう場合でもズキズキスルを使うのが普通。〕
- セナカノ デキモンガ ジクジク イタムネヤ。(背中の中が痛く痛く) 「タワシ」(水状の膿液)が出るような腫瘍の痛みをいう。

III. 頭部の感覚

- ### 3-1 頭
- カゼヒ ーテ アタマガ ガンガンスル。〔ワレソ ーヤをよく言う。〕
 - ネツデ アタマガ クラクラスル。〔ボー ットスル / ポカ ーントスルも〕
 - ナンデヤロ。エロ アタマガ フラフラスル ワ。
 - フツカヨイデ アタマガ ズキズキスル。
- ### 3-2 顔面
- ハズカシテ カオガ ボット アコ ナッタ ニ。
 - ハラ タッテ ハラ タッテ アタマガ カッカシテ キテ ナー。
- 〔カッカスルは、高熱を發して顔が~~~のようにか、怒りで頭が~~~という場合にしか使わない。恥ずかしい場合にカッカスルは言わない。〕
- ### 3-3 目
- テレビノ ミスギデ メガ チカチカスル。
- 〔蛍光灯が チカチカスル のようにも使うが、これは身体感覚ではない。〕
- メーガ ツカレテ ショボショボスルヤロー。
- ＜煙が目に入った場合などは、オノマトベを使わないようである。〔メガ アケ

トレヤン(樹てめぬい)などと言う。>

○メニ ゴミガ ハイッテ ゴロゴロスル。〔コロコロスルとも。〕

3-4 耳 ○ハナカンドラ (鼻をかぬ) ミミガ ツーントシタ。

○トソネルガ ナガカッタデ マダ ミミガ キーント ナツトル。(鳴っている)

○コーケツアツヤロ カ。イツモ ミミガ ジーント ナツトル ニ。(同上)

○ミミノ アナガ ジュクジュクシテ ウツシーネヤ ワ。

3-5 鼻 ○クシャミガ デソーデ ハナガ ムズムズスル ワ。

○カゼヒーデ ハナガ グズグズ ユーテ ウツジー ワ。〔グズグズスルとも〕

○ワサビノ イレスギヤ。ハナニ ツーント キタ ワ。

3-6 口(くち)

(口全体) ○ナツワ (納豆は) キライヤ。クチガ ネバネバスルデ(〜ずから)。

〔ネチャネチャスルとも言う。通常ネバネバは物自体の粘着性を表し、ネチャネチャは同時に接触面の皮膚感覚としての粘着性を表すが、必ずしもそう決まっているわけではないこと、この事例に見る通りである。〕

○カゼネツヤロ カー。クチノ ナカガ ネットリシトル。

<梅干しを食べた時にはスッバイとかアスッバとか言い、オノマトベ不使用。>

<甘いものを食べた時などには、オノマトベは使わない。>

(歯) ○アー サブ。サブテ ハーガ ガチガチ ナル ワー。

<ガチガチヤともガチガチスルとも言わない>

○アー サブ。ハー ガクガクスル ワ。〔アケトは ガクガク とも言う。〕

○ムシバガ ズキズキ イタイ。〔ズキズキスルとも。〕

○ハーガ シクシク イタイ。〔シクシクスルとも。〕

○ハーガ キリキリ イタム。<キリキリスルとはあまり言わない。>

(舌) ○アー カラー。シタガ ヒリヒリスル。〔ピリピリスルとも。〕〔シビレルも〕

○ムギワ クチノ ナカデ モサモサシテ ナー。アカン ナー。

3-7 喉 ○ノド カワイタ。カラカラヤ。<カラカラスルは×>

○カゼデ ノド ヤラレテ ガラガラヤ。〔声が嘎れた感じをいう。〕

○コノ タケノコ アクガ エライ ツヨイ ナー。ノドガ イガイガスル ナー。

<空気の悪い時に「喉がイガイガスル」とは言わない。>

○アノコ ゼンソクデ イツモ ヒューヒュー ユーテ。

○ナンカ クルシソーニ ゼーゼー ユートル ガ。〔ゼーゼースルとも。〕

IV. 胴体の感覚

4-1 肩 ○カチカチニ カタガ コッタ。〔カチカチヤも。〕<カチカチスルは×>

○コチコチニ カタガ コツトル。〔コチコチヤも。〕

4-2 胸 ○アー コワカッタ。マダ ムネガ ドキドキシトル。

〔ハッピーー マツノ ツライ ナー。ムネガ ドキドキシテ ナー。のような場合にも使う。〕

- アホナ (とんぼい)。ムネガ ギューツト シメツケラレルミタイヤ サ。
 ○ナンカ ワルイ モンデモ タベタンヤロ カ。ムカムカスル ワ。

4-3 腹

(空腹) ○ハラガ ヘッテ ハラガ ヘッテ グーグー ユートル ガ。<グーグースルは×>
 は×> <キュルキュルも×>

○ハラ ベコベコヤ。モー。<ベコベコスルは×>

(満腹) ○ミズ ノミスギテ ハラ ダブダブヤ。<ダブダブスルは×>

(ダブダブはズボンなどの緩いのにも言う。)

○ヨー タベタ ナー。モー ハラ パンパンヤ。<パンパンスルは×>

(腹下し) ○ナンデカシラン ハラガ ゴロゴロ ユーテ シカタガナイ ワ。

(ゴロゴロスルとも。)

4-4 胃 ○コナイダカラ イーガ シクシク イタイネヤ。〔シクシクスルとも。〕

○イーガ キリキリ イタムガ イカイヨー カノー。〔キリキリスルとも。〕

4-5 尻 ○ナンヤラ ケツツガ ムズムズスルガ ジーヤロ カ。(痔の時。)

○シリノアナ モゾモゾシテ キショクワルイ ワ。(蟻虫などの場合。)

V. 手足の感覚

(手) ○テーガ ブルブル フルテ ハシガ モテヤヘン。<ブルブルスルは×>

(足) ○アルクスギテ モー アシガ ガクガクスル。ヘタリコンデシマイタイ ワ。

(ヘタリコムは、疲労困憊して座りこんでお意。)

○アシガ シビレテ アー ジンジンスル。

(その他)

○ソコニ ナンヤラ ヌルヌルシタ モノガ アッテ キモチワルイ ナー。

○ヌルッシタ モンガ テーニ アタツタンヤ ワ。ナソト ナメクジヤ。

○コンニャクミタイナンガ ベターアッ アタンネヤ ニー。ホッラ コワカッター。

VI. 関節(骨)の感覚

<ネチガエテ クビガ マーラン。こういうときオノマトベは使わない。>

○コノゴロ ウンドーブソクデ ホネガ ボキボキ ユー ワ。<ボキボキスルは×>

【小考】

1. アクセントについて。反復形式の4拍語は、たいてい第1拍のみ高い頭高型だが、第2拍卓立になるものも若干ある。いずれにしても、2拍以上にわたる高音連続はない。なお、反復形式の場合、たとえばズキズキを丁寧に発音すれば、ズキズキともなることがある。

ちなみに、強調するときには、アクセントの高低の差を拡大したり、強めを置いたり、促音を挿入したり、拍の持続時間を長く(長呼)したりする。オノマトベ自体がそういう性質を持ちやすいものだが、当方言ではそれらが主に第1拍目において生起する。

2. 共起関係で特に注目したいのは、文末詞「ワ」と共起しやすいことである。実際には教えたり主張したりなど各種の訴え方に応じて、その他の文末詞も使われるのではあるが、それらはいずれも「ワ」にも言うことのできるものである。「ワ」の本性が、話者内面の開陳に機能する点にあるとすれば、身体感覚を表現する文の末にこれが座ることは、いかにも当然のことではないか。

3. 隣接語彙について。身体感覚をどう捉えるかによっても違うが、もし触覚や痛覚を中心に認めるなら、すでに、上乗の諸事象のなかにも、狭義の身体感覚と見るには多少疑義あるものもいくらかあった。たとえば、「気分がスッキリした」「寒くてガタガタ震える」「ブルブル震う」「恥ずかしくて顔がポット赤くなった」「寒くて歯がガチガチ鳴る」「麦は口の中でモサモサする」「喘息で喉がヒューヒューいう」「喘息で喉がゼーゼーいう」「腹がグーグーいう」「腹がゴロゴロいう」「ヌルヌルしたものに当たって気持ちわるい」などがそれである。これらはあるいは心理的なものの表現であったり、対象の状態を擬する擬態語擬声語であったりするもので、譬えて言えば赤と青との交わるところにある紫のようなものであろう。これに類するものにはなお、次のようなものがある。

- アセ グッショリ カイタラ ネット ピーテック。
- テーニ ベターット チーガ ツイタ サー。
- コノ シャツ サラットシテ ハダザワリガ エーヤロ。
- ヒゲガ ジャリジャリシテ キモチワルイ ワ。
- オトーサンノ テー ザラザラシテ キモチワルイ ナー。
- オネーチャンノ テーワ スベスベシテ キモチエー ナー。
- ベタベタ ヒツツクナ。ウルサイ ナー。
- オモチ ツクルノワ テーニ ネチャネチャ クツツイテ イヤヤ。
- コノ オモチ モッチリシテ オイシソー。
- クラゲワ コリコリト オイシー ナー。
- ヤッバリ テウチウドンワ コシガ アツテ シコシコト オイシー ナー。

4. 快・不快の割合について。上記の異語数のすべて(全73語。ただし上の3に追加した○印の隣接語詞群を除く。)を快・不快で分類してみると、快が7語、不快が65語、その他1<ポット>で、快が9.5%、不快が89%ということになる。つとに性向語彙分野でも指摘されているように、やはりマイナスイメージの語が圧倒的に繁榮している。

ところで、その不快の類のなかで、文字通り「痛み」を表すオノマトベの占める割合は、18%である。この数値をどう評価するかには、いろいろの見方があるが、痛みを表す語彙の体系は、①部位・②性質・③程度・④原因の4軸から成り、しかもこれを形容詞や動詞によって表現することが多いことに鑑みるならば、オノマトベによる感覚的表現が18%に止まることは、自然なことと評価してよいのではないか。

5. その「痛みを表すオノマトベ」12語につき、下記のような分析項目で分析してみよう。この項目は、「『方言資料叢刊』第2巻の調査について」の「記述方法」の②語

義の項、ならびに佐藤愛子・中村直人「痛みを表わす言葉—キリキリ、シクシク、ズキズキ、ヒリヒリはこんな痛みです—」（「月刊 言語」Vol.19 No. 7 1990）を参考に、筆者が試みに設定したものである。各々の項目について、5段階評定し、これを点数化すれば、次のようになる。評定は筆者一人の主観による。3は、中間ないしはニュートラルを意味するわけであるが、できるだけ3以外で評定するようにした。

		5 ← 3 → 1											
		チカチカ	チクチク	ヒリヒリ	ビリビリ	ビクビク	シクシク	ギョット	ジンジン	キリキリ	ズキズキ	ザクザク	ガンガン
①	痛みの程度の強い弱い	2	2	2	2	4	2	4	3	4	4	4	5
②	痛む部位の広い狭い	1	2	2	2	4	2	2	2	2	2	2	2
③	痛む部位の深い浅い	1	2	1	2	4	4	4	4	4	4	4	5
④	痛みの持続の長い短い	2	2	3	3	1	2	2	4	4	4	4	5
⑤	痛みの反復性と瞬間性	4	4	4	4	1	4	2	4	3	4	4	4
合 計		10	12	12	13	14	14	14	17	17	18	18	21

これによれば、②の項目では、ビリビリ以外はみな痛みの部位の「狭い」点に特徴がある。これは部位の特定化を意味しよう。また、⑤の項目では、「反復性」に特色が認められる。もともとヒリヒリとかズキズキとかいう反復形式の疊語には、痛みの感覚の反復が含意されているのであるから、これは当然のこととされるのである。

その他の項目では、さまざまな段階のものが揃っている。

(さとうとらお 大阪教育大学)